緑線＝干拓地

アクセス ACCESS（北鹿島公民館まで）

【車でお越しの場合】

- 佐賀市内より …… 約45分

《高速道路（長崎自動車道）利用》

福岡市内 …… 北鹿島 …… 長崎市内
約100分　約60分

- 武雄・北方I.C下車 …… 約30分
- 嬉野I.C下車 …… 約20分

【JRでお越しの場合】

- JR長崎本線肥前鹿島駅下車 …… 徒歩約20分

《JR特急＋祐徳バス利用》

JR博多駅 …… JR肥前鹿島駅 …… JR長崎駅
約60分　約60分

鹿島バスセンター …… 乙丸 下車
約10分

佐賀方面に乗車

発行：鹿島市教育委員会　生涯学習課　H29.2

北鹿島の歴史を歩こう

《旧常広城本丸跡地（北鹿島小学校）》

はるか昔、北鹿島の地は海でした。北鹿島平野は現在の嬉野市役所（塩田）あたりまで入り込んだ湾で、「森」の五ノ宮神社は湾に浮かぶ小島だったのです。それが塩田川や鹿島川の氾濫と堆積などによって少しずつ陸地化していきました。さらに室町時代くらいより後は、人間の手で湿地帯だった場所が開拓されたり、干拓が行われ、耕地化・宅地化して現在の形になりました。

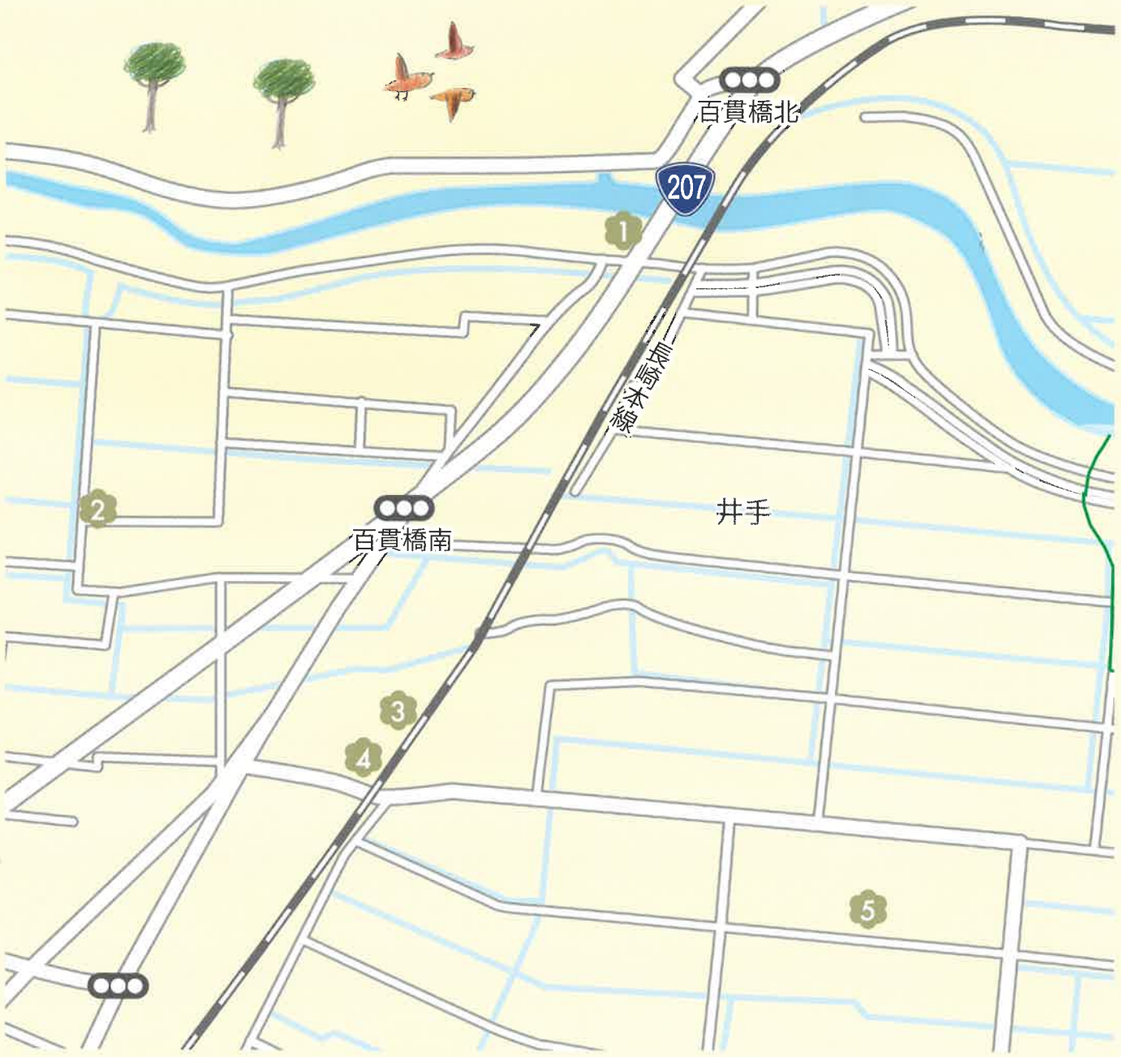
北鹿島の記録に残る歴史は室町時代から500年あまりの短い期間にもかかわらず、江戸時代に鹿島鍋島藩の常広城が造られたことから、城が高津原に移転するまでの約270年間、鹿島地域の中心として栄えました。

北鹿島には鹿島鍋島藩にゆかりのある遺跡や干拓、それらにまつわる神社やお寺があります。これらの歴史をたずねてみましょう。

※江戸時代の常広村・新籠村（旧鹿島藩領）と三部村・井手村（蓮池藩領）と現在の「古城」「常広」「新籠」「三部」「井手」の各地区の区割りは、昭和末から平成にかけての「ほ場整備事業」で大きく変わってしまいました。本冊子は現在の各地区割に沿って説明しています。

井手

井手とは川の堤防のことです。井手区は、塩田川の堤防沿いに東西に土地が広がっていたために付いた地名と思われます。江戸時代の井手村は、はじめは鹿島藩領でしたが、三部とともに慶長16年（1611）に佐賀本藩領、慶安2年（1649）には蓮池藩領となりました。（三部の項参照。）井手は元禄年間（1688〜1703）の絵図には「井手方村」と書かれています。井手は土地のほとんどが「開拓地」と海側の「干拓地」です。干拓地は、昔は新籠村でした。井手で特徴的な地名は、番号の後ろに柳・松・杉などの木や谷が付く地名です。一本杉・一本柳・二本柳・壱の柳・弐の柳などの地名があります。明治時代の初め頃に土地に1から順番に名前を割り振ったのでしょう。同じく旧蓮池藩であった三部とともに多い地名です。他に寄安・江内・琵琶甲・大篭・明治篭の字名があります。



1 百貫

百貫は江戸時代の終わりにつくられた港で、古渡より後につくられた塩田川の渡し場でもありました。港には問屋や網元の家が建並んでいました。水揚げする漁獲量が一日約百貫（375kg）あったことから地名がついたといわれます。明治42年には祐徳稲荷神社から武雄を結んでいた祐徳軌道に、乙丸から分岐して百貫まで線路が引かれました。現在のように橋が架けられたのは昭和2年のことです。

2 観音堂（井手）

観音堂は2間×1間半の小さなお堂ですが、奥に仏殿が造られ、十一面観音菩薩の像がまつられています。

3 天満神社（井手）

井手にはもとは上と下の2つ天満宮がありましたが、昭和63年に1つにまとめられ、上の天満宮1つになりました。鳥居は下の天満宮から移されました。社殿の左側には稲荷大明神、丹生大明神、八大竜王などの石祠や板碑などが並んで建てられています。

4 無量院

無量院は当初は小さな観音堂でしたが、享禄元年（1528）に「紹念」という僧が地域の人々に頼まれて正久寺という寺を建立したのが始まりです。その後久留米出身の「天誉」という僧が住職となり浄土宗に改めて、「報土山無量院」と名付けました。その後、寛永年間（1624〜1643）に落雷のため全焼しますが、すぐに再建され、以前にも増して人々の信仰を集めました。

5 大師堂

堂内に弘法大師の座像が安置されているので、大師堂と呼ばれています。このほかに石造の地蔵菩薩の像が安置されています。

三部

三部は江戸時代の初めは鹿島藩領でしたが、慶長16年（1611）に佐賀本藩が支藩の領地の三部（３割）を本藩に引き上げたときに、鹿島藩では三部と井手の田畑がそれに当てられたことから、「三部」の地名が付きました。その後、慶安２年（1649）蓮池藩領となりました。そのため北鹿島には鹿島藩領と蓮池藩領があったので、干ばつ時の水争いが絶えませんでした。三部も井手と同じく参の柳・二本杉・一本～五本榎・脇ノ江・末増と番号がつく地名と干拓地に由来する地名があります。脇ノ江と末増は干拓地で、江戸時代は新籠村に属していました。

緑線＝干拓地

1 海中庵跡

三部の集会場にあった観音堂を、無量院の墓地に移し建立された寺です。現在は廃寺となり、墓地と庵の跡地だけが残っています。境内には3体の地蔵菩薩がまつられています。

2 天満神社（三部）

神社の神殿の中には木造の天神の座像が安置され、その前には木彫の随身像と石造の小さな狛犬が置かれています。また入口には寛保４年（実際は延享１年、1744年）の年号が刻まれた明神鳥居が建てられています。社殿の裏には丹生神社や伊勢神宮などの石祠や石碑とともに、有明海沿岸の神社に特有の、沖の島の「御髪大明神」の石祠も並んでいます。

北鹿島の地名から見た開発の歴史

北鹿島の土地の開発は、湿地に土を入れ耕地化した「開拓地」と海を埋め立てた「干拓地」によって行われました。海岸付近の干拓地の地名には、現在省略されている場合も多いのですが「篭（籠）」や「新田」の文字が付きます。また「一町三反」や「三十石」、「弐十人」などの地名は「開拓地」と思われます。また、より内陸部の地域には「丸」の文字が付く地名が出てきます。これはより古い室町時代など中世の「開拓地」と思われます。

中世以前には見渡す限りの湿地であった北鹿島平野を、中世から江戸時代初めにかけて徐々に開拓して耕地にし、耕地化する湿地が無くなった江戸時代の前期から干拓事業が始まったのでしょう。

明治９年に作製された「地租改正地引絵図」を見ると、当時の耕地は現在の水田と大きく異なっていて、細長い水田と、水田より土地を高めた、うね状の畑地が交互に配置されています。水はけが悪く、さらに干ばつ時には水利が悪い北鹿島の低地を、工夫しながら耕作していたのがよくわかります。

地租改正地引絵図（一部拡大）

古城

古城はその名のとおり、「古い城」を示すもので、江戸時代の鹿島鍋島藩の藩主の館であった「常広城」の本丸（現在の北鹿島小学校）を中心とした旧城内の地域です。文化４年（1806）に高津原に新城である「鹿島城」ができたため、「古城」と呼ばれるようになりました。古城地区は本来、常広の一部で、地域は常広地区に取り囲まれています。

現在は御殿・西小路の２つの小字からなります。御殿も西小路も常広城に由来する地名です。

1 常広城

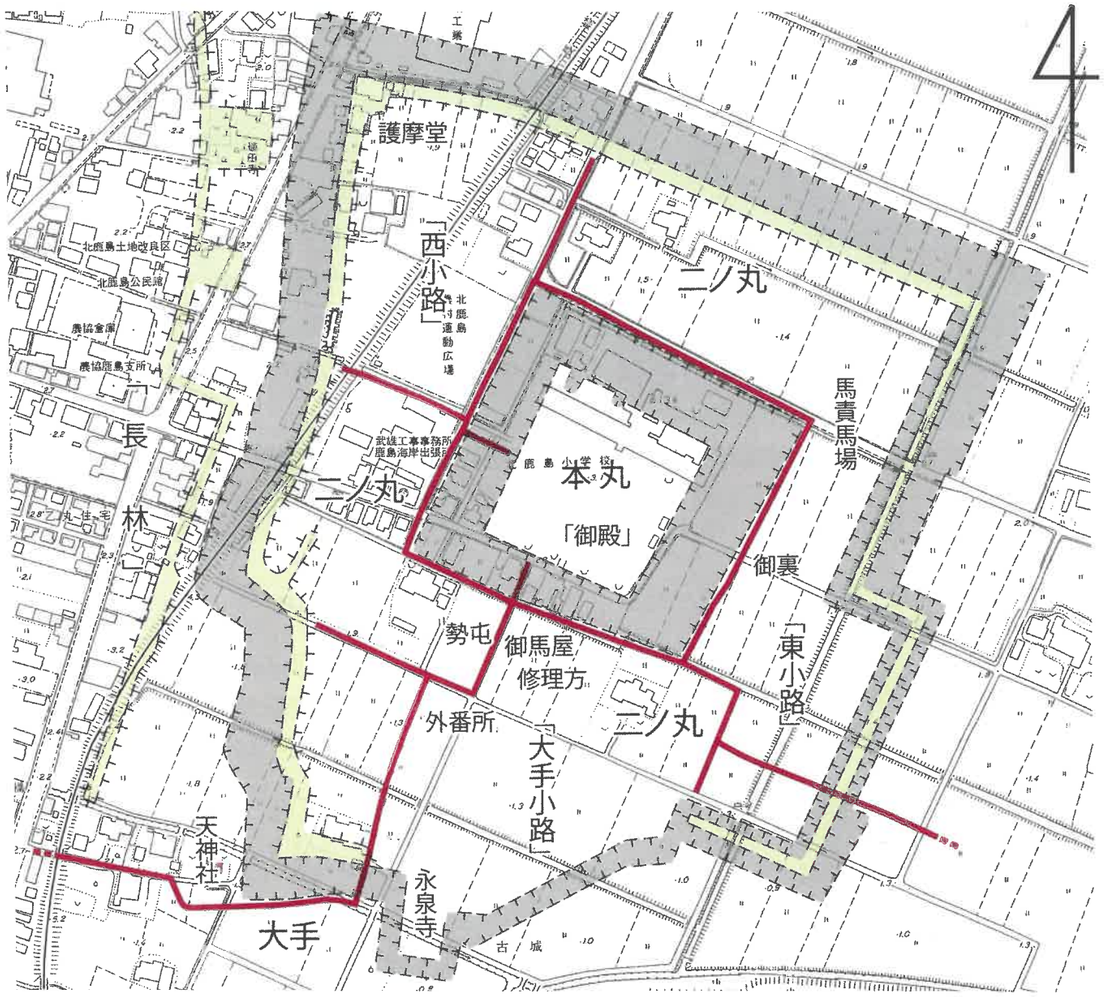
常広城は戦国時代の末期に鍋島信房という武将が本格的に造りました。後には佐賀鍋島鹿島藩２万石の城として、藩の役所であり、鹿島鍋島家の居城となりました。当時は今よりも海岸線は常広城に近く、海岸に面した城といえます。当時の記録には「浜城」と書かれたものもあります。

当時の常広城は、二重の堀と土手に囲まれ、外堀の内側の二ノ丸には、本丸を取り囲むように上級の藩士の屋敷がありました。

本丸は現在の北鹿島小学校の位置ですが、今では内堀は埋め立てられ、堀の痕跡が水路として残っています。城の正面である大手道は、現在の小学校の正面である西側ではなく、南側にありました。城の立地は当時の戦略によるものでしたので、平和な時代となった江戸時代では、水害常襲地である常広は、藩主の居城がある場所としては大きな問題でした。たびたび見舞われる水害に対応するため、「長林」という土手を城の西側に設けていましたが、それでも十分ではなく、元禄11年（1698）から寛政２年（1790）の約100年間で13回の洪水被害あったという記録があります。　とうとう鹿島藩は幕府に願い出て、文化４年（1807）に高津原に城を移しました。それ以降、この場所は古城と呼ばれるようになりました。

2 鹿島神社

鹿島神社は、鹿島鍋島藩初代藩主だった鍋島忠茂が現在の千葉県の香取市にいたとき、信仰していた茨城県の鹿島神宮を城内にほこらを造り、信仰したことが始まりと言われます。城が移った後は城にあった鹿島神社も高津原に移されましたが、地元の人々が改めて鹿島大明神をまつり、鹿島神社をつくったのです。



土手　赤線 城の旧道　堀

常広城縄張り図

中村　願行寺の門（城の門であったという言い伝えもあります）

常広城の内堀の痕跡

常広城大手道

常広

常広の名の由来ははっきりしませんが、地名をそのまま読むと「常に広い」となるので、「非常に広い場所」という意味だったかもしれません。江戸時代の慶長絵図には「恒広」と書かれています。常広は湿地を開拓して耕地や宅地とした地域と思われます。常広城の遺構は古城地区だけでなく、常広地区にも広がっています。地区の小字名には常広城に由来する地名と、開拓に由来する地名があります。裏町・田代・堀田・有富・藤左エ門・長珍・平尾・常元・佛供田・番床・外通・角田・箱田・くい杭・木坪・境・荒牟田・栄増・大手小路などの字名があります。井手や三部のように番号が付く地名はありません。

1 神明宮

昔は「雨宝童子神社」と呼ばれていましたが、至徳元年（1384）に伊勢神宮をまつり、神明宮と改めました。代々の鹿島

鍋島藩主の信仰が厚く、祭典や造営費なども藩費でまかなわれていました。明治3年（1780）に1度は高津原に移されましたが、常広区民の願いで元の場所に戻りました。

2 荒神堂

火の神様である荒神を祭ったお堂があります。由緒はわかりません。

3 天満神社（常広）

常広の北東の角に天満神社があります。境内に宝暦2年（1752）の銘がある明神鳥居があります。また社の中には肥前狛犬が1対安置されています。狛犬の年代は鳥居と同じ頃の作品と考えられます。

4 瑞田寺

瑞田寺は、曹洞宗の寺で、天正4年（1576）に籾嶽城主の原一氏が、大翁妙栄という僧を招き開山したといわれています。本尊は聖観世音菩薩です。境内には六地蔵塔や供養塔、六角水盤、羅漢像などが安置してあります。

5 幸福寺

幸福寺は曹洞宗の寺で、俊翁妙祖が開山したと伝えられます。俊翁妙祖は永禄10年（1567）に亡くなっていますので、それより少し前の開山と考えられます。昭和35年に火災のため全焼し、その後再建されました。門の左右に六地蔵塔が安置され、その一つに天正7年（1579）の銘があります。

天満神社について

天満神社、いわゆる「天満宮」はほとんどの集落にある、私たちに最も身近な神社です。天満宮は「菅原道真」という実在の人物をまつってあります。菅原道真公は今では勉学の神様としてよく知られていますが、天満宮がこれほど多いのは、昔の人がみな勉学にはげんでいたというわけではありません。道真公は、京の都から大宰府に左遷された事をうらんで、災害などのたたり（天災などすべての災害）を起こした「たたり神」として恐れられています。つまり、我々の身近にある「天満宮」とは、私たちの暮らしに「たたり」が及ばないよう、たたり神である道真公を怒らせないように、天満宮として敬ってきたのです。

新籠

新籠とは新しい干拓地という意味です。新しい干拓地に常広や白石などから人々が移住して、寛文5年（1665）に新籠村ができました。ただし、この新籠村は現在の新籠地区とは区域が大きく異なっており、現在の三部や井手の海岸部の干拓地まで含んでいました。新籠には鱸江・一町三反・十久間・弐十人・末廣・三十石・二本松・境・福田・道元・横江・御髪・今篭・北海・脇ノ江・明治篭・富山・外横江・番所の20の字名があります。この中には以前は地名の後ろに「籠・篭・新田」の字が付いていた地名が多くあります。

緑線 ＝ 干拓地

1 寿松庵跡

幸福寺の末寺で、幸福寺七世の徹岩興宗が建てた曹洞宗の寺です。徹岩興宗は安永5年（1776）に59歳で亡くなっています。現在は取り壊されて跡地が残っています。境内には石造の地蔵像、観音像、如来像があります。

2 薬師堂

薬師堂と呼ばれていますが、堂の中には薬師如来像はなく、天明6年（1786）の銘がある弘法大師像があります。

3 大神宮

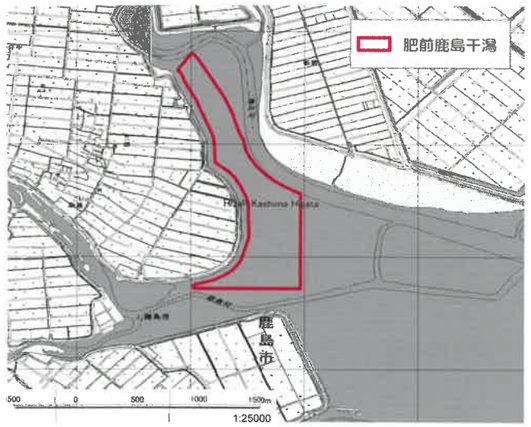
大神宮は伊勢大神宮のことです。祭神は伊勢皇太神宮で、神殿内には木彫の神像と慶応2年（1866）の銘がある水神宮の石祠が置かれています。

4 天満神社（新籠）

天満神社の祭神は菅原道真で、神殿には木造の神像と、寛文12年（1672）の石祠を再建した、嘉永3年（1850）の銘がある石祠が安置されています。また境内には14基の石祠、11基の石塔と数多くの石造物が並んでいます。稲荷大明神や豊倉大明神など農耕関係の神様、御髪大明神や八大竜王、水神などの水の神様などのほか、庚申塔も建てられています。

5 肥前鹿島干潟（ラムサール条約登録湿地）

ラムサール条約とは、特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地の生態系や環境を保全することを目的とした条約です。「肥前鹿島干潟」はその条約に登録された湿地です。広大な干潟に生息しているカニやゴカイなどの生物をエサとするシギ・チドリなどの渡来地となっており、平成27年（2015）年5月にラムサール条約登録湿地となりました。

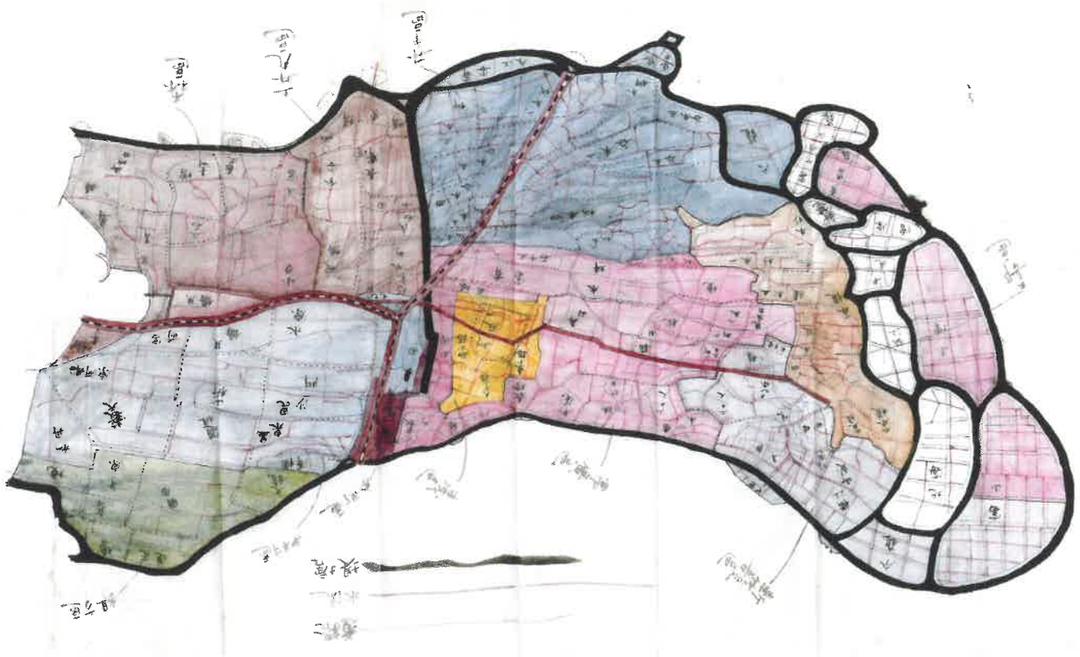


北鹿島の干拓

北鹿島の干拓は藩の許可を得て行われました。新しい耕地は藩と事業者の割合が6対4もしくは7対3で分配されました。主な干拓地の事業年度は下のとおりです。

新籠	寛文５年（1665）完成
脇ノ江籠	延宝４年（1676）完成
平尻籠	延宝６年（1678）開始
北海籠	延宝７年（1679）開始
今籠	貞享３年（1686）開始
末増籠	元禄７年（1694）開始
富山籠	安政５年（1858）開始
常吉籠（明治籠）	宝永６年（1709）開始　明治29年完成

北



南

「鹿島村図」（明治末～大正）（所蔵　鹿島市民図書館）

乙丸

乙丸の地名の由来については２つの説があります。まず「乙丸」の文字の意味を考えると「乙」は「甲乙丙丁・・・」の乙のことで、「２番目」という意味でしょう。次に「丸」という文字ですが、丸には「囲まれた土地」という意味があり、たとえば城の「本丸」や「二ノ丸」は堀や石垣などで囲まれた区域（曲輪）という意味で使われています。また城だけではなく中世には開拓地の地名に使われることが多く、北部九州でも「源五郎丸」や「五郎丸」などの例があります。このことから「乙丸」も「常広城の二ノ丸である」という説と、「中世の開拓地である」という2つの説があります。今のところ乙丸に城の遺構は発見されておらず、また、二ノ丸とすれば常広城は佐賀城よりも広大なお城になってしまうので、中世の開拓地の可能性が高いと思われます。乙丸には「乙丸」「本田」の2つの字名があります。

赤線＝旧多良海道

1 乙丸交差点

乙丸交差点は道が緩やかに曲がっています。この道と交差点は、明治38年（1905）に祐徳稲荷神社から武雄まで全線開通した祐徳軌道の線路が敷かれていたときの名残です。また明治42年（1909）にはこの交差点から分岐して百貫まで線路が引かれました。最初は馬車鉄道で馬が列車を引いていました。全線は約23キロで、所要時間は約２時間でした。明治39年（1906）には鹿島～祐徳間は馬の代わりに石油発動車が使われるようになり、大正4年（1915）にはすべての区間で石油発動車になりました。また大正10年（1921）には蒸気機関車になりましたが、昭和５年（1930）に長崎線が浜駅まで開通したことから、昭和６年（1931）には廃線となりました。

本町

本町という地名は、比較的新しい地名です。本町には「元の町、古い町」という意味があります。城が高津原に移転した後の新しい城下町の「新町」に対して、常広城（旧鹿島城）の城下町だった「本町（もとまち）」なのです。ただ本町の名前が付けられたのは明治時代になってからのようで、江戸時代の終わりころまでは「鹿島町」の記録があります。さらに元禄年間（1688～1703）の絵図には「鹿島村」と出てきます。まさしく江戸時代前期の「村」としか呼べなかった時代から、城下町として発展し「町」となるまで、鹿島鍋島藩城下町の中心地として発展していきました。。本町は「本町」の字名のみです。

赤線＝旧多良海道

1 鹿島宿旧継場

「継場」は江戸時代に宿場での人馬の継立て（次の宿場まで荷物や人を送ること）などの業務を行うところで、「問屋場」「継立場」などともいいました。次の宿場である浜宿にはこの「継場」の当時の建物が残っています。鹿島宿の「継場」があったのがこの場所でした。現在は本町公民館になっています。

2 吉田家住宅

吉田家は鹿島村の地主を務め、明治以降は貸金業や米穀商として繁栄した家です。吉田家住宅は、明治23年（1890）に建築されたもので、主屋と土蔵があります。主屋は通りに面して建っており、木造二階建ての居蔵造りの建物で、入母屋平入りです。吉田家住宅は嬉野市にある国重要文化財の西岡家住宅とよく似ており、重要な建物で国の登録文化財に登録されています。明治から昭和初期の本町の通りのにぎわいをしのばせる建物です。

3 諸国屋

江戸時代の後期に日本全国を測量して回り、地図を作った伊能忠敬はここ鹿島も訪れました。鹿島を訪れたのは文化9年10月25～28日のことで、25日の夜は本町で宿泊しました。伊能忠敬は徳人屋忠右衛門宅に、副隊長の坂部貞兵衛は諸国屋茂平宅に宿泊しました。この諸国屋茂平宅が諸国屋です。

4 天満神社（本町）

天満神社の祭神は菅原道真です。天保15年（1844）に寄進された明神鳥居があります。五ノ宮神社の例大祭の時は下の宮として10月14日にお下りがあり、16日まで御旅所として神様が休まれます。

伊能忠敬

伊能忠敬は、延享2年（1745）上総国山辺郡小関村（現：千葉県九十九里町）で生まれ、18歳の時に香取郡佐原村の商家・伊能家の婿養子となります。寛政6年（1794）に49歳で長男に家督を譲り隠居します。

隠居した忠敬は江戸に住まいを移し、幕府天文方・高橋至時に弟子入りし、暦学・天文学を学びます。はじめは私財を投じて測量事業を行っていましたが、忠敬の作成した地図の完成度に感嘆した幕府が支援を行うようになり、日本全土の地図作成という国家的プロジェクトへと発展ました。

忠敬は寛政12年（1800）、55歳から足かけ17年間をかけて、日本全国を10回に分けて測量し、地図作成に精力を傾けました。文政元年（1818）忠敬は死去、73歳の生涯でした。残念ながら、忠敬の存命中には、日本全国の地図を完成させることはできませんでしたが、弟子たちによって、地図の作成は進められ、忠敬の死から3年後の文政4年（1821）に、『大日本沿海輿地全図』が完成しました。

伊能忠敬旧宅（千葉県香取市）

伊能忠敬

中村

中村は北鹿島平野の「真ん中の村」の意味でしょうか。中村の名前は江戸時代から記録にありますが、当時の中村は現在の乙丸と組方を含めた地域と思われます。中村には温泉・横沢・松角・藪天・道祖・船河原・宮ノ前・貝ノ橋・山枡・毘沙門・水深の字名があります。このうち横沢は中世に横造城があったと推定される場所で、龍造寺氏と有馬氏の激しい戦いがあった古戦場です。

赤線＝旧多良海道

1 幸徳寺

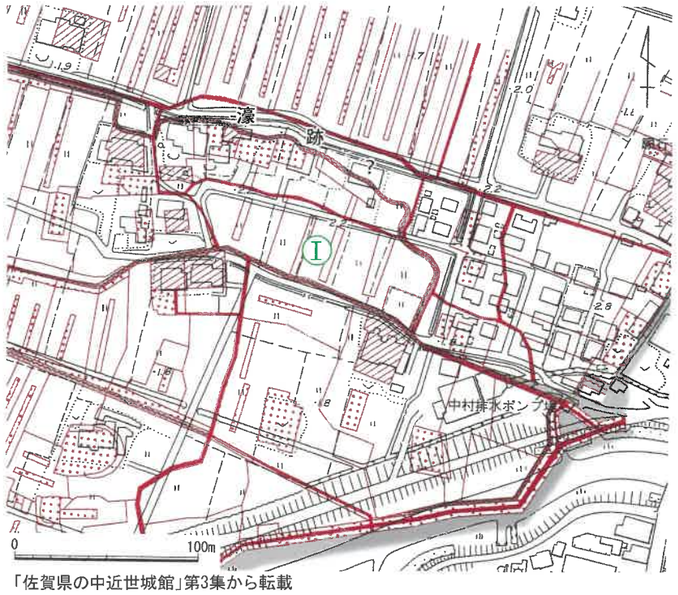
幸徳寺は浄土真宗の寺です。中村地区の横澤清吾という人物が出家して浄順と号し、慶長４年（1599）に道場を造りました。正保2年（1645）に幸徳寺という名称で正式に寺となりました。

2 願行寺

願行寺は浄土宗の寺で、天正18年（1590）筑後国の善導寺の純誉という僧が現在の場所に寺を建てました。寺の山門は城にあった城門が移築されたとも伝えられています。門は薬医門の型式で鹿島城赤門と同じ形式ですが、赤門よりかなり小さい門です。どこに使われていた門なのか、また移築されたいきさつなどはよくわかっていません。観音堂内にある木造菩薩立像は南北朝時代のものと言われています。また境内には供養塔などの石造物が多く、最も古いもので寛永２年（1625）の供養塔があります。

3 横造城

横造城は戦国時代に当時鹿島を支配していた有馬氏が造った城です。戦国時代の終わり頃に龍造寺隆信とはげしい戦いが繰り広げられた城です。天正４年（1576）龍造寺隆信は白石から鹿島地域に攻め寄せました。有馬勢は鹿島川を境に守りを固め、この横造城と、高津原の鷲の巣城などを中心に戦いました。結果的にこの横造城の戦いで負けた有馬勢は藤津郡から高来・彼杵郡まで撤退し、それまで有馬氏の家来だった藤津郡内の領主たちも龍造寺氏に従うようになりました。現在城の遺構と確認できるものは全くありませんが、周囲の田んぼはきれいな方形をしているのに対してこのあたりだけ乱れています。また昭和23年（1948）に撮影された航空写真に濠跡らしきものが写っていますので、このあたりに城があったと考えています。



赤線＝明治時代の区割り

「佐賀県の中近世城館」第3集から転載

4 毘沙門天社

元は大慈堂と呼ばれ、観世音菩薩が本尊としてまつられていました。大慈堂は浜の泰智寺八世の説宗巍禅が藩主に願い出て建立したと伝えます。大慈堂は明治時代になって廃れ、後に毘沙門天を安置して信仰するようになりました。

組方

鹿島鍋島藩第３代藩主鍋島直朝公は、高津原台地の開発のために寛文年間（1661～1672）に足軽組約70戸を高津原に居住させました。直朝公は高津原の土地の他に、足軽組が治める組知行として、中村に土地を与えました。これが組方(「組の土地」という意味)という地名の由来です。組方の字名は久龍・國廣・定蓮・樋口・土井下・浄源・境の字があります。

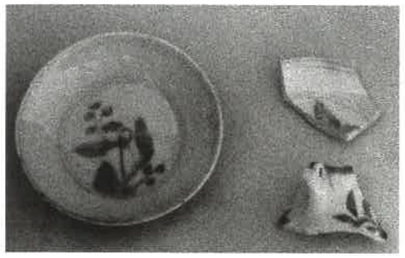
赤線＝旧多良海道

1 国広遺跡

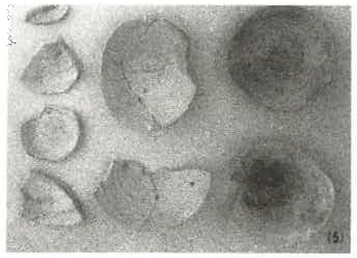
国広遺跡は、ほ場整備事業に関わり確認された遺跡です。開発によって壊される区域を昭和62年（1987）に発掘調査しました。その結果、溝の跡や杭の跡が確認されました。溝の跡からは室町時代の終わり頃の陶磁器や土師器などの焼物や、砥石、灯明の芯立て、磨り臼などの石製品、容器や鉤などの木製品などが出土し、溝の近くにこの時代の住居などがあったことが考えられます。

国広遺跡出土遺物

国広遺跡全景



中国製の焼物



土師器

瓦質土器

漆塗り碗

石臼

木製かぎ

土井丸

土井丸は乙丸と同じく「丸」の文字がつきます。「丸」は中世の開拓地に付けられた地名と思われます。（乙丸の項を参照。）土井は土居のことで、「土井丸」とは「土居に囲まれた開拓地」という意味でしょうか。土井丸には稲童角・水町・長石・永深・東構・今安・殿橋の小字があります。

旧多良海道

赤線＝旧多良海道

1 古渡

古渡は別名「長浜の渡し」とも呼ばれ、旧長崎街道の脇街道である多良海道で、有明の古渡と鹿島の土井丸を結ぶ江戸時代の渡船場です。この渡し場の渡し賃は一人１文、荷物は３文、馬は９文と決められていました。また武士は無料でした。現在は当時の渡し場の西側に古渡橋がかかっています。

2 鏡智院

鏡智院は浄土宗の寺です。最初は禅宗の寺院でしたが一旦荒廃し、元和３年（1617）に全誉が浄土宗の寺として再度開山しました。本尊は阿弥陀如来像で、脇侍で観音菩薩と勢至菩薩が安置されています。

3 正福寺

正福寺は曹洞宗の寺で本尊は釈迦如来座像です。明応２年（1493）に亡くなった龍源寺三世の大忠良楷が開山したと伝えます。最初は庵で、安永年間（1772～1780）に寺となりました。寺宝として元の本尊であった木彫の聖観世音菩薩の座像があります。戦前までは毎年7月21日にお大師さんの千灯籠祭があり、青年相撲などもあり大変賑わったそうです。

4 天満神社（土井丸）

現在は天満神社の敷地は土井丸区の公民館が建っています。元あった鳥居や神殿、灯籠などは処分され、現在は敷地の片隅に、生田大明神や稲荷大明神、豊倉大明神、八天狗などの石祠や石碑などが並んでいます。

5 殿の橋

天明４年（1784）につくられた塩田川上流にある柳瀬の堰から取水された農業用水路が北鹿島の森・土井丸・常広を流れています。殿の橋とはその水路と江戸時代の多良海道が交わる場所で、その水路にかかる橋のことです。現在、水路は暗渠となり、水路の上は歩道になったので橋はなくなっています。鹿島藩の殿様が通っていたのでついた名まえでしょうか。もしかしたら殿様専用の橋だったのかもしれません。

森（もり）

「森」とは五ノ宮神社の「森」からついた地名です。古代、北鹿島平野が海だった頃には島であったと思われます。その何万年も前は、この森は火山だったというのは本当の話で、森に登ると火山の名残の溶岩がごろごろしています。室町時代の終わり頃には平野の真ん中にあり見晴らしが良いこともあって、城として利用され、有馬氏と龍造寺氏との戦いの時には重要な役割を果たしました。また江戸時代は藩主の別邸として利用されていました。森は貝橋・橋津・宮﨑・小力・五ノ宮)・善次・増寿・御所田・鼻操・宮下の小字がありますが、五ノ宮神社に関係する地名として五ノ宮、御所田、宮下などがあります。

赤線＝旧多良海道

1 正覚庵跡（しょうかくあんあと）

正覚庵は浄土宗の鏡智院の末寺ですが、現在は墓地のみが残っています。コンクリート製のお堂があり、木造の聖観世音菩薩の座像と石造の阿弥陀如来座像が置かれています。

2 五ノ宮神社（ごのみやじんじゃ）

五ノ宮神社は塩田川の治水などのためにつくられ、川や水の神様である水象女神をまつっています。奈良時代の和銅２年（709）に、奈良県にある丹生神社を分霊し建立されたと伝えられます。その名のとおり5番目の宮という意味があります。塩田川に沿って一の宮から五の宮まで置かれ、一の宮は嬉野市塩田町宮元にある丹生神社です。鹿島藩の歴代藩主の信仰も厚く、江戸時代は水害や干ばつの雨乞いなどに霊験があるとして信仰を集めました。現在も北鹿島地区の氏神で秋の例大祭には浮立や獅子舞が奉納されています。

境内の入口には第３代鹿島藩主鍋島直朝公が慶安元年（1648）に寄進した肥前鳥居が立っています。鹿島市内では紀年銘があるものとしては最古のものです。また境内の背後には庶民の信仰を反映して数多くの石造物が建てられています。

3 塩竈神社（しおがまじんじゃ）

五ノ宮神社の東側には塩竈神社があります。永禄２年（1559）に陸奥国名取郡（現在の宮城県塩竈市）の塩竈神社の分霊を移してつくられました。塩竈神社は塩や海の神様である塩槌翁（シオツチノオジ）をまつりますが、有明海では塩はできませんので海の神様として信仰されたのでしょう。

4 森岳城

森岳城は龍造寺隆信が鹿島を攻めたときの城で、その時の武将の犬塚鎮家（盛家）の居城といわれています。隆信は犬塚氏を派遣し、有馬氏の重要な城であった森岳城を攻め落とし、自分の城として犬塚氏に守らせたのではないかと考えられます。森は平野にある独立した丘陵ですが、丘陵に登ると丘陵の周囲に段状に平たい場所がつくられているのがわかります。これが「曲輪」と呼ばれるもので、この曲輪が組み合わされて城の縄張りがつくられています。城の正面は東側で、特に南側と西側は崖の状態で登れません。縄張り図を見ると城の東側に敵を防ぐための曲輪が重なっているのがわかります。城の入口は①若しくは②の部分で「虎口」と呼ばれます。また公民館の敷地には犬塚盛家の墓といわれている五輪塔があります。

江戸時代には現在の社務所のあたりに鹿島鍋島家の別邸が置かれました。社務所の裏には当時の庭園の面影が残っています。

「佐賀県の中近世城館」第3集から転載

Ⅰ 主郭

Ⅲ 虎口

Ⅱ 犬塚盛家墓

Ⅳ 別邸の庭園跡

北鹿島の民俗芸能

五の宮神社の「獅子舞」は2人１頭立ての赤青１対の獅子で、囃子はなく、素朴で鎮魂的な所作が特徴です。獅子頭は、一般的に見られる獅子頭とは大きく異なり、扁平で円盤型の仮面の形をしていて、むしろ「面」と呼ぶのが適当です。このような獅子面は佐賀県西南部に特徴的にみられ、全国的にも珍しいものです。韓国の仮面劇に類例があることから、大陸文化の影響を受けたものではないかと考えられます。

鹿島鍋島藩歴代藩主

歴代	氏名（生年～没年）	居城
第１代	鍋島忠茂（1584～1624）	常広城
第２代	鍋島正茂（1606～1686）	常広城
第３代	鍋島直朝（1622～1709）	常広城
第４代	鍋島直條（1655～1705）	常広城
第５代	鍋島直堅（1695～1727）	常広城
第６代	鍋島直郷（1718～1770）	常広城
第７代	鍋島直熈（1745～1805）	常広城
第８代	鍋島直宣（1763～1819）	常広城⇒高津原屋敷（鹿島城）
第９代	鍋島直彝（1793～1826）	高津原屋敷（鹿島城）
第10代	鍋島直永（1813～1854）	高津原屋敷（鹿島城）
第11代	鍋島直晴（1821～1839）	高津原屋敷（鹿島城）
第12代	鍋島直賢（1834～1859）	高津原屋敷（鹿島城）
第13代	鍋島直彬（1843～1915）	高津原屋敷（鹿島城）